

聖書：I サムエル 15：1～35

説教題：主が喜ばれること

日時：2016年8月14日（夕拝）

サウルは13章で主の御言葉に従いませんでした。そのため、預言者サムエルは彼から離れ、主もサウルとともにいないという状態にしばし置かれました。しかし今日の章の1節を見る時に分かることは、サウルはそれっきり捨てられてしまったのではなかったということです。ここで再びサムエルを通して主の言葉が語られています。これはサウルにもう一度チャンスが与えられたということです。果たして彼はどう応答したでしょうか。

今回彼に命じられたことはアマレクの聖絶です。3節にありますように、皆殺しにすることです。これは今日の多くの人々にとってつまずきになることかもしれません。しかし私たちが知るべきは、聖絶は聖書を調べると、実際にはわずかに数えるくらいしかないということです。そしてそれらはすべて積みもった罪を罰する神の一つの方法でした。2節にアマレクのしたことがまず述べられています。それはイスラエルがエジプトから上って来る途中、彼らを攻撃したということです。しかも汚い手を使って、そのことをした。申命記25章18節を見ると、彼らはイスラエルが旅の途中で疲れて弱っている時に、後ろの方にいる落伍者をみな切り倒したと記されています。すなわち、弱く、病気で、年老いた人々を狙った。そのため主は、約束の地に入ってイスラエルが休息を得た後には、アマレクを天の下から消し去らなければならないと言われていました。

それ以来、すでに数百年が経過していました。しかしアマレクはなお罪の行為を続けていました。18節に「罪人」アマレクとされています。また王アガグについて33節で「あなたの剣が、女たちから子を奪ったように」と言われているように、なお残虐行為を行っていました。このような悪は、ある限界の線を越えた時には取り除かれなければならないのです。もちろんイスラエルもその例外ではないことを私たちは頭に入れておくと良いと思います。イスラエルも主の前に罪を重ねるなら、同じくさばかれるのです。

さてサウルはこの命令にどのように従ったのでしょうか。彼はケニ人たちを巻き添えにしないように、アマレク人から離れるように指示した後、聖絶を実行しました。8節後半に「その民を残らず剣の刃で聖絶した」とあります。しかしその一方、彼は9節にあるように、「アガグと、それに、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しみ」、聖絶しませんでした。なぜでしょうか。王を生け捕りにしたのは後々何かと有利なことがあると考えたからでしょう。一方の羊や牛は何のためでしょう。彼らは、これらの良いものを殺すのはあまりにももったいないと思った。何かにも有効に使うことはできないか。そして考えた。そうだ！これをいけにえとして主にささげれば良いのではないか。そうするなら主もお喜びになるのではないか。しかしこの考えには裏があります。すなわち全焼のいけにえではない他のいけにえの場合、脂肪などは焼いて煙にしますが、他の部分は自分たちのものにすることができるといことです。後のサウルの言葉からすると、このように主張したのは民が中心だったようです。サウルはその民の声に抵抗できず、それを許してしまったのです。

さて、このサウルの姿を主はどう評価されたのでしょうか。11節：「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。」ここで衝撃的なことは神が「悔いる」と言っていることです。これは神でも失敗することがあるということなのでしょう。しかし29節を見ると、主なる神を指して、この方は「悔いることがない」と宣言されています。片方では「悔いる」と言われ、もう片方で「悔いることがない」と言われている。どう考えたら良いのでしょうか。おそらく一番良いのは、11節で「悔いる」と言われている意味は、「本当に残念に思った」という意味であると取ることでしょう。神は確かに私たちが告白するように、主権者であり、永遠不変のご計画によってすべてを治めておられます。しかしだからと言って、サウルのこのような姿を見て何も感じず、何も思われぬお方ではない。ここではその神の姿が人間になぞらえて、人間に合わせた表現で語られていると考えられます。私たちが何かあった時に悔い、心から残念に思い、悲しむように、神もそうであられた！私たちが良く見つめるべきは、このような神のお姿です。神は私たちをはるかに超越しておられる方ですが、だからと言って何にも動じない、冷たい機械のような方ではないのです。神は私たちのあり方に深い関心を持っておられるので、人間の言葉を用いて表現する限界があるとは言え、「悔いた」と表現せざるを得ない思いを持たれることがある

のです。

主はそこで「サウルはわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかった。」とっています。サウルはせつかくチャンスを与えられたのに、また同じことを繰り返した。注目すべきは、サウルは主から一言で「わたしのことばを守らなかった」と総括されていることです。大部分は従っても、ある部分で従わないことは、結局主の前では不服従とみなされるのです。

さてこの主の評価と判決とが 12 節以降でサウルに告げられます。サムエルが会いに行くと、サウルは迎えに出て来て 13 節で「私は主のことばを守りました。」と言います。そこでサムエルが「では私の耳に入るあの羊の声、牛の声は何ですか。」と尋ねると、サウルは「あれは良いものだから惜しんだのです。後でいけにえとして主にささげるためです。その他のものはきちんと聖絶しました。」と答えます。サムエルは 17~19 節でもう一度、主の命令を思い起こさせています。特に 18 節にあるように、「絶滅させるまで戦え」と主に言われたのではなかったか、と。しかしサウルはなお 20 節で「私は主の御声に聞き従いました。」とアピールします。ただ民があそこにある最上のものをいけにえにするために取って来ただけなのです、と。そんな彼に対して、今日の章の中心となるメッセージが語られます。22 節:「するとサムエルは言った。『主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。』」

ここで問われていることは、主はいけにえをささげることと、服従の生活とで、どちらを喜ばれるのかということです。答えは、主の御声に聞き従うことの方であるということです。私たちの生活を振り返ってみてどうでしょうか。ここでの「いけにえ」は私たちが行なう様々な宗教的儀式を表しています。今日の私たちに当てはめれば、毎週日曜日を聖日として取り分けて礼拝すること、その礼拝の中で賛美をすること、御言葉を聴くこと、献金すること、また様々な奉仕をすること、礼拝後も色々な人に関わり、仕える働きをすること、……。もちろんこれらが正しくなされていることも主は喜ばれます。しかしここで問われているのは、あなたの御言葉に従う生活はどんなのかということです。それをいい加減にしておきながら、自分は決められた儀式をきちんと守って

いるから、神は私を良く思ってくださいと言えるのだろうか、決してそうではない！ということです。神は外側のことよりも、私たちの実質的生活を見えています。一人一人がご自身の御言葉に従う歩みをしているかどうかを見ている。サウルは結局、主の御言葉を軽んじました。自分の考えで妥当だと思ふことは行ない、そうでないことについては自分の考えを優先させました。主はこれは偶像礼拝だと言っておられます。これでは神を敬っていることにはならない。一見主に従っているような雰囲気でありながら、実際は主を退けている！そこで「主もあなたを退けた」とサムエルは宣告します。これはたった1回でこうなったわけではありません。チャンスを与えられながらも、同じことを繰り返したので、ついに決定的な言葉としてこれが語られたのです。

サウルはここに至って24節で「私は罪を犯しました。」と告白します。しかしその後のやり取りを見ると、どこまで真実な悔い改めだったのか、クエスチョンマークがつかれます。彼は30節でこう言います。「私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私の面目を立ててください。」 神の前で自分の姿を振り返るより、人の前での姿を気にし、そちらが上に来ている彼の心が現われてしまっています。

32節以降ではサムエルがアマレクの王「アガグをずたずたに切った」と記されています。思わず読む人すべてが眉をひそめるような記事かもしれません。しかしこの章の流れを考慮するなら、サムエルはここで主のみことばに従うとはどういうことなのか、その模範を示したものと言えます。本来はサウルがこのことをすべきでしたが、彼がしなかったので、サムエルが行なった。これは先に見ましたように、アガグの残虐な行為に対する神の審判です。これは神がこうするようにと直接にお命じになったことだから行なわれたことであって、今日、神の直接啓示が止んだ時代では勝手に何か当てはめられる事柄でないのは言うまでもないことです。

15章の最後は悲しみで閉じています。35節に「サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルを見なかった。」とあります。サウルはこうしてみことばが与えられない状態に放置されることになったのです。サムエルはこのことを悲しみました。そして最後にもう一度、主の悲しみが記されています。決して悔いることがない方に「悔やんだ」という言

葉を用いずにいられないほどの悲しみをサウルは主に与えた。サウルは決して主の前に  
どうでも良い一つの駒だったのではありません。これまでサムエル記8章からずっとイ  
スラエルの初代王サウルのことが語られて来ましたが、そのサウルがこのような姿を決  
定的に示した時、主は彼のことで悲しまれ、悔やまれたのです。実に神はこういう方な  
のです。この主のお姿を私たちは良く思い巡らすべきです。そしてこのように今日も私  
たちを見つめておられる神を思って、この神にこのような悲しみを与えることがないよ  
うに歩む者でありたいと思わされるのです。

果たして私たちは神の御前にどうでしょうか。「主に喜ばれる歩み」をささげている  
でしょうか。主は外側のことを見ているわけではありません。私たちがいくら賛美歌を一  
生懸命歌っても、使徒信条やウェストミンスター信条を告白しても、あるいは修養会や  
カンファレンスに参加しても、たくさんのキリスト教の本を読んで知識を得ても、御言  
葉に従う生活がなければ主は喜ばない。ローマ書1章3節に、パウロが使徒の務めを受  
けたのは、「信仰の従順」を人々にもたらすためだと言われています。「信仰」と「従順」  
は一つのことです。信仰は従順に現れなければならない。従う生活なしの信仰はない。  
私は神を信じてはいるが、従っていないということはない。それでは信じていることに  
はならない。むしろそれは偶像礼拝だと今日の箇所で行われていました。私たちはその  
ことを良く考えたいと思います。

ローマ書12章1節：「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供  
え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」 Iヨハネ5章3  
節：「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令とは重荷になりません。」 私  
たちは自らを振り返って、もし間違っていたと思うなら悔い改め、正しいあり方へ軌道  
修正させられたいと思います。神は外側ではなく、内的なものを見ておられます。服従  
の生活に現れる真の信仰を求めておられます。私たちは悔い改め、赦しを頂いて、「主  
が喜ばれる生活」にこそ焦点を当てて、今週の歩みをささげたいと思います。そしてそ  
れこそをわたしは喜ぶと言われる神の祝福の中に信仰の歩みを導かれて行きたいと思  
います。